



耳無用

宮坂静生



虫はげしとて誘はれ耳無用
千の虫われから消えて吾も又
もう届かざり邯鄲もころころも
これからは鳴かざる虫と親炙しんせきに
山椒の実記憶真白くなるばかり
人間に理想のありし崩れ築



鳥の絵の裏側いまま霧攻めに
秋彼岸杏の幹の鉄くろがねに
玄関に墓来パラリンピック了り
満月を送り出したる山の形なり
わが書庫へ入日すなはち荒花野
故国まで捨てしにあらず雁は

ドイツへ帰りし母子へ

悼色川大吉

牛蒡掘り読みつぐ『明治精神史』